新連載

元中央大学職員の――世界放浪 1

石井誠啓 *Masayoshi Ishii*
（1997年中央大学経済学部卒。97―2001年中央大学職員）

ハリケーンのグアテマラにて

世界一周足かけ4年目、現在、中米のグアテマラにいます。ここグアテマラは先のハリケーンの被害で多くの人が亡くなり、また多くの家々が土砂で埋もれてしまいました。少しの間ですが、復旧作業のボランティアに参加しました。災害現場なんて初めて見ましたがびっくりです。自分の足の下の地面が一階の天井というほどの泥の量!! 泥にまみれて出てくる家具や衣服の数々……。シャベルで泥を掘り、バケツやリアカーで運び出す作業は単純でしたがハードでした。腕は筋肉痛、手にはつぶれたマメ。被災者の気持ちになったらそんなことは言ってられませんね。

これまで52カ国

4年前に退職し（なにを隠そう、中央大学職員でした）、世界放浪の旅に出ることを決意しました。まず、英語を習得しようとニュージーランドに1年間ワーキングホリデーで滞在し、英語の語学学校に通ったり、果樹園や牧場で働いたりしました。そのあとたまたま、映画「ラストサムライ」に出演する機会に恵まれたのです。

そして、ヨーロッパ、中近東、アフリカ、アジアを主に陸路で、2年間かけて旅しました。一度日本に帰国し、現在は中南米大陸縦断中です。これまで訪れた国は52カ国になりました。

「よくそんなにお金があるね」と言われますが、僕のスタイルは貧乏旅行。いわゆるバックパッカーというやつで、地元の人と同じ乗り物で移動し、同じものを食べ、できるだけ節約します。宿はその国で最も安いところを探し、部屋はドミトリーと呼ばれる数人の相部屋で1泊100～400円くらいです（ヨーロッパは除きます）。ぜいたくさえしなければ、日本より全然お金はかかりません。きちんと情報収集し、行ってはいけないところに行かなければそんなに危険もありません。世界のあらゆるところに住む人々が、何を食べ、何を信じ、どのように生活しているか、僕の好奇心はいまだ尽きません。

今回から数回にわたって、僕が見たこと、体験したことをお伝えさせていただきます。まずは、「ラストサムライのエキストラ体験」から。

「ラストサムライ」体験記

ニュージーランドに1年間のワーキングホリデーでいたとき、何気なく日本語の無料情報誌を読んでいたら、今度ハリウッド映画「ラストサムライ」がニュージーランドで撮影されること、日本人エキストラを募集していることを目にした。2002年8月のことである。

ワーキングホリデー期間を終えたら、すぐにでも世界放浪に出る予定だったが、せっかくだからと必要書類を送り申し込んでみた。日本に帰国後、メールで採用を知った。ハリウッド映画に出れるんだってわくわくしながら、再びニュージーランドへ飛んだ。

大砲隊エキストラ

ニュージーランドは北島と南島から成り立っている。撮影は北島の南西にあるニュープリマスという小さな町の郊外で行われた。到着後、まず25人ずつのグループに振り分けられた。もっとも多いときで日本人エキストラの数、約５００人。部屋は3人1部屋だったが、新築のモーテルで快適。雑費及びギャラ含め週に数万円。食事は朝と昼は無料のビュッフェで食べ放題。さすがハリウッドだね。

けっこうサマに……なっていますか？
＝ニュージーランドのロケ地

僕のメインの役は大砲隊となった。「なんだ、サムライ役じゃないのか」と、がっくりしたが仕方ない。スタッフから砲撃の仕方を学び、練習を繰り返す。1台の大砲につき6人1組になり、弾を運ぶ人、詰める人、火をつける人、号令をかける人などそれぞれの役割により発射される。その轟音は耳をふさいでいても体の芯にまで響き渡る。空砲とはいえ、扱いを間違えれば大ケガのもとだ。

銃の撃ち方も学んだ。旧式は手順が面倒で発射まで時間がかかる。新式は簡単で、弾込めから発射までの時間は短い。銃は絶対に地面に横にして置くことを許されなかった。与えられた銃は自分の責任で管理しなくてはならない。食事中も銃を立て、手元に置いていた。

殺陣の練習はおもしろかった。サムライ役が切りつけてきたら、どうかわしどう反撃するかという型を体で覚える。斬られるときは大げさに倒れてみせる。少年時代にやったチャンバラごっこを思い出した。

アメリカ元海軍軍曹による整列、行進の訓練は緊張感があった。掛け声は常に「イエッサー！」軍曹は見た目迫力あるし、よく怒鳴るのでまるで本当の軍隊に入隊したみたいだった。ただの素人を映画の中では軍隊に見せなきゃいけないんだから、厳しいのは当たり前か。銃はかなり重く、慣れるまでは腕がつりそうになったけど、1人だけ乱してたまるかとみんな思っていたに違いない。

1週間後の本番

1週間の訓練ののち、撮影がはじまった。日によって多少時間は変わるが、大体朝早くからはじまり、日が暮れると終了する。朝、宿に迎えに来るバスに乗り、ロケ地へ向かう。テントの中で朝食をとり、衣装に着替える。メイク及び髪のセットをしてもらい、武器を受け取る。そして呼ばれるまで、テント内でひたすら待機。ずっと撮影現場にいることもあれば、1日中テント待機で終わる日もあった。しょせんエキストラは駒でしかない。指示もよく変わるし、その日何をやるかはロケ現場に行くまでわからない。待機中はおしゃべりしてようが、寝てようが自由だった。それでもギャラをもらえるんだから文句はいえないけど、暇をもてあますこともあり、正直つまらないなあと思うこともあった。

現場でも指示はニュージーランドの天気と同じくらいころころ変わる。監督もアシスタントもその場で試行錯誤しながら撮影しているようだった。さっきと言ってること違うじゃん、てこともしばしば。スタッフによって指示が異なることもあり、困惑することもあった。同じシーンを何度も何度も繰り返すときは、「まだ終わらないの、もういい加減にしてくれよ」って愚痴をこぼす。素人にはわからない。プロの目が納得す

るまで撮影は続けられる。あとで画面に映るのなんか数秒だろうに。そのたった数秒にこだわって映画はつくられていく。

遠目だったが、トム・クルーズ自身がこだわってるのもわかった。うまくいかないときはイライラしてるようだった。トムは、最初トムのそっくりさんでカメラの立ち位置が確認されたあと、ここぞというときにだけ登場する。そっくりさんは本当にそっくりで、「あのトム本物？」「それともニセモノ？」ってエキストラの会話は盛りあがった。

「チャンバラごっこ」の気分

ヘリからトム・クルーズ

トムは現場にヘリコプターで来ることが多かった。僕らエキストラはヘリコプターが近づいてくる音が聞こえると「あっ、トムコプターだ!!」って叫んだものだ。トムはいつもニコニコしていて、僕らエキストラに対しても愛想がよかった。ハリウッドスターだから威張っているのかなって思ってたけどまったくそんなことなく好印象。僕はすっかりトムのファンになった。彼の今後の作品が気になるくらいだ。

"How are you?"ってトムの方から挨拶してくれたときは緊張して"Good! Thank you."しか言い返せなかった。なんじゃそりゃ？　と自分の小者ぶりが情けない。目が合ったときは嬉しかったし、近くで演技を見られたときは感動だった。

最初にトムを見たのはある日の撮影終了後で、トムが現場から帰ろうというときだった。グループごとに整列していたのにもかかわらず、走り寄ってしまい、あとでスタッフからこっぴどく怒られたっけ。「おまえらはここに仕事に来てるんだろ!!」って。そりゃわかるけど、本物のハリウッドスターを間近で見たら、興奮して駆け寄ってしまうのが自然な反応なわけで。

人間というのは不思議なもので、日が経つにつれトムがいることに慣れてしまうと、何の特別な反応もなくなり、普通にトムの存在を認識するようになっていった。つまり、「トムはどこだ、どこだ？」って騒いでいたのが、「あー、トム今日はあそこにいるね」である。

渡辺謙、真田広之、ペネロペ…

渡辺謙さん、真田広之さんは言うまでもなくかっこよかった。パーティで何度か見かけたときももちろんだが、演技をしてるときの存在感はすごかった。さすがプロの役者さんだって思わせるオーラを放っていた。男惚れしてしまいそうなほどかっこいい。どこにいるのかなあって探し、見つけると次の瞬間には見とれていた。握手してもらって、ツーショットで写真がとれたときは感激し、ハイになっていた。エキストラをやらなきゃこんな機会は一生なかっただろう。

トムの当時の恋人だったペネロペ・クルスもトムの養子の子達を連れてよくロケ現場に来ていた。「ハロー！」って声かけたら、ニコッて笑顔を返してくれた。その後別れてしまったのが不思議なくらいそのときは仲がいいように見えた。あるとき撮影本番前に2人がながーいキスをして、スタッフ、俳優、エキストラ全員がそれを見つめ、キスが終わるのを待っていた。まるで映画のワンシーンだよ。ペネロペは小柄で華奢な感じ。きれいな人だったな。

見上げるとトムのおしり

友人によく「どこに出てるの？」って聞かれる。僕は3カ月間エキストラとしてほとんどの戦闘シーンにかかわった。大砲を撃つシーン、サムライと政府軍が戦場で戦う最初と最後のシーン。どこかにはいるはずだ

けど、もっともエキストラがいたときは500人。

「ウォーリーを探せ！」より難しいかもしれない。1シーンだけは確実に見つけられるシーンがある。最初の森の中の戦いでトムが馬から落ちたとき死体の横にある銃を拾う。この死体が僕。死体向きの顔だったのかどうかはわからんが、たまたまスタッフに呼ばれ、監督に「それじゃあ、そこに横たわって」と指示された。見上げるとトムのおしり。いつか僕がおじいさんになったとき、ビデオを見せながら孫に「これがおじいちゃんだよ」と言いたい。

本場中国の小林寺拳法の精鋭たちと。僕も学生時代、ガジったことがある＝小林寺近く

撮影最終日、念願のサムライ役がまわってきた。自分の役が政府軍に決まった最初のときから、いいなあってうらやましく眺めていたヨロイをとうとう着た。かさばるし、重かったけど、着て興奮しまくったのは言うまでもない。最後の最後の日に着れるなんて、これぞまさしくラストサムライ!!　ただロンゲ（かつら）にカブトは僕には世界一似合わないことを知った。

4週間と聞いていた撮影は終わってみれば3カ月。トラブルや嫌なこともなかったわけではないが、その何倍ものいい出会い、貴重な体験ができた。すべての撮影が終わり、ロケ現場からバスで帰るとき、いろいろ思い返してたら涙が出てきた。1つの映画がつくられるのに実に多くの人々、監督、俳優、エキストラ、AD、大道具、小道具、スタントマン、衣装、メイク、武器担当などがかかわり、時間が要される。一人ひとりが自分の責任をしっかりと果たすことによって数秒、数分のシーンの積み重ねが映画になってゆく。エキストラに参加したのは初めてだったし、おそらく最後だろう。映画好きな僕にとって、そのつくられていく過程を目の当たりにできたことは一生の宝だ。

撮影終了パーティは盛り上がった。20分のプレミア上映に会場は歓喜の嵐。僕も嬉しくって、飲みまくって、テンション上がりっぱなし。僕は監督のズーイックを見つけて一言――。

「いい映画つくったじゃん！」

偉そうにごめんなさい。

中国の反日感情の陰で

「どこから来たの？」。夜行列車で移動中、近くの中国人グループに突然質問された。とうとうきたか、と緊張が走る。折しも中国では反日感情が高まっていたから、一瞬韓国人と答えようか迷った。が、正直に日本人と伝えた。

筆談「靖国神社参拝……」

車両内の中国人から一斉に注がれるまなざし。外国人はもちろん、日本人は僕ひとり。次々と質問が飛んでくる。普段なら現地の人との交流は望むところなのだが、時期が時期だし、質問がきわどいので戸惑う。中国語を話せない僕は筆談で必死のやりとり。

「小泉首相の靖国神社参拝をどう思う？」と書いた紙を突きつけられた。別にどうとも思ってないのが本音だが、ここはアウェー、「よくないと思う」って答えてしまう小心な僕。「そうだよな」って笑顔で同意される。教科書改訂問題のことだとか返答に困ったりしたが、日本と中国は「朋友（友達）」だと言われ、ほっとひと安心した。

05年4月、北京や上海でデモが起こったり、日本人留学生がいきなり殴られたりと反日ニュースが流れる真っ最中、僕は中国にいた。正直、タイミング悪いときに来ちゃったなあって思っていたが、一旅行者としては何も問題なかった。むしろ中国人とのいい出会いがあった。

部屋が一緒になった中国人のおっちゃんは日本のことをほめまくる。

「日本人は礼儀正しい。日本製品は質がいいが、中国のはダメ。日本製品の不買運動なんて馬鹿げてる。歴史とビジネスは違う。それに戦争とは殺し合いなのだから仕方ない。経済大国日本に追いつくのはあと100年かかる」と彼は言う。

西安で出会った中国人女学生リーは「反日感情は別に日本人に対してではなく、日本政府に対するもの。日本政府は中国人が敏感なことをなぜあえてするのかわからない」って。確かに過去の首相の靖国神社参拝を思い返せば反発があることは十分予想できたはず。教科書改訂問題にしても中国人は侵略されたという解釈にこだわる。

「デモ参加者は一部の極端な人たちだけだよ」って口調で、僕が出会った人たちからは特に反日を感じることはなかった。登封で泊まった宿のオーナーは日本人だからと逆に親切にしてくれたようだった。「困ったことがあったらなんでもいいなさい」って。また北京で出会った75歳の中国人趙さんは僕を盧溝橋に連れて行ってくれた。「この橋を日本軍が駆け抜けたんだよ」って説明してくれた。趙さんがいうには確かに大部分の中国人が日本人をよく思ってないって。日本人と文化交流したいという趙さんはただ今、日本語を勉強中。別れ際に「また北京に来なさい。今度来たときは手作りラーメンをつくってあげるから」って言ってくれた。

僕が反日を感じたのは雲南省麗江で見かけたカフェの看板。おっ、見晴らしのよさそうなカフェだなって入口をのぞいたら、そこにあった看板に「世界中の人々を歓迎します。ただし日本人を除く」って。ショックだった。どこの国に行っても、日本人といえば、歓迎されるのに、この国にはそうじゃない場合がある。「拒絶日本人」という文字が心にズシーンと響いた。

非知・ODA、知悉・宮崎アニメ

国家としての意思と国民の意思というのは必ずしも一致しない。だから国家としてはメディアや教育により国民の意思を国家の意思に近づけようとしているのでは？　と感じた。テレビでは日本軍の残虐行為や日本軍をコケにする内容を何度か見た。

一般の中国人は日本がODAを中国に供与してることや日本人がケガさせられたことを知らないようだった。都合がいいようにコントロールされる情報。一方、本屋では日本でお馴染みの漫画「ドラゴンボール」や「ワンピース」の中国語版が並んでいた。宮崎アニメだって出回っている。

イギリスの新聞や中国に留学してる後輩は、反日デモは国内の不満を外に向けるために意図的に中国政府が扇動し黙認した、という。日本の常任理事国入りや、劣閣諸島問題に対する外交カードとも考えられる。まあ、難しいことはよくわからん。日本人と中国人が何のわだかまりもなく仲良くやっていけたらそれでいいのになあ。

日本ではデモの様子が何度もテレビに流れ、少なからず中国に対して悪い印象を持った人もいるかもしれないけど、それが中国のすべてではないと思う。報道は物事の一部だけを大きくとりあげる。デモが起きたことは確かな事実。でも13億人もいるんだから、いろんな人がいて当たり前じゃない？

四川省成都で床屋に行った。角刈りにされちゃうかなあって、ちょっと不安だったけど5元（60円）だし、思いきって切ってもらうことにした。働いてる女の子2人は、終始笑顔で、技術も確かで普通に切ってもらえた。中国語と片言の英語で話しかけてくる。店をでるとき、何か中国語で言われたので「うん？」ってわからない表情をしてみせると、思いっきりの笑顔で「ウェルカム、チェンドゥ（成都）!!」だって。中国いいじゃんって、心が温かくなった。

僕が長い旅に出たワケ

中央大学卒業（1997年）後、母校に事務職員として就職した。大学職員として、待遇及び状況とも申し分なかった。人にも恵まれ、仕事を嫌になる理由なんてなかった。勤めてた最後の1年は学生のスポーツ

や文化活動をサポートする部署にいた。阿部慎之助選手の巨人入りのドラフトのセッティングをしたり、箱根駅伝に行ったり、水泳部・田中雅美さんらが活躍したシドニーオリンピック報告会を学内でやったり、仕事はおもしろかった。学生とも仲良くなって、一緒にサッカーしたり、僕の家でプレステで盛りあがることもあった。少林寺拳法部には特別に入部?させてもらって一緒に練習に励んだ。そう、中央大学職員としての日々は楽しかった。

だが、カンボジアを訪れたことで仕事を辞め、長期の旅に出ることを最終的に決断した。それまで休みを利用して、アメリカ、インド、ペルーなどを旅してるうちにいつしか長期旅行に出たいという思いがつのっていたときだった。短期旅行だと目的地に到着した途端にもう帰国までの日程を計算しなくちゃならない。心から旅に集中できないのがイヤだった。時間にこだわらず、好きなところに好きなだけ滞在できる旅がしたい。

中国・元陽で見かけた赤ちゃん

カンボジアは迷っていた自分への最後の一押しになった。なぜか？

それはこの時代に日本に生まれたことは「人生の選択」ができるんだということに気づかされたから。楽しく安定して生きるよりもなぜ生きてるかをどうしようもなく知りたくなった。

カンボジアの問い抱えて

ポルポト派（クメールルージュ）という共産主義がカンボジア国土を支配していた時代（１９７５～７９年）、国民の３人に１人、約３００万人が意味もなく殺されていった。国民はわずかな食料で強制労働を強いられた。病気になっても薬はウサギの糞、点滴は泥水。空腹に耐えかねて豚の餌をとったら処刑された。無断でバナナを木からとったら、内臓を家族の前でえぐられ、その家族は強制的に拍手して歓声をあげなければならなかった。

ポルポト派に両親を殺され、兵士として育てられたアキ・ラ氏（シェムリアップ地雷博物館運営者）は言う。「武器はおもちゃだった。残虐行為、飢餓は日常だった。世界はこんなものだと思っていた」と。ベトナム軍、カンボジア軍と移ったアキ・ラ氏は国連平和維持軍で働いた後、現在に至るまでひとり地雷撤去のボランティアをしている。それが彼の償いだそうだ。

カンボジアは農村部に住む人がいまだ地雷の被害に遭い、手足をなくしたり、亡くなったりしている。彼らは貧しいがゆえ、地雷があるかもしれないと危険を理解しつつも農業に従事するしかない。

シェムリアップでの地雷被害者はこれまで約２万７０００人。カンボジア全土で残る地雷の数は推定６００万個。すべての地雷を撤去するのにあと50～１００年かかると言われている。

ついちょっと前、１９９３年まで戦争だったカンボジア。何も知らずのんきに育ってきた自分の命がどれだけありがたいか、カンボジアが教えてくれた。僕は戦争で人を殺す必要もなく、殺されるのを見ることもなかった。僕は貧しい環境に生まれず、食べたいものを食べて育ってきた。運がよかったのだろうか？　でもなぜ？　なぜ僕はこのときこの時代に日本に生まれたんだろう？　自分がなぜ生まれたか、生まれた意味が知りたい。どう生きても人生は一度。それなら後悔のない人生を送らなきゃ！

――そして、世界をめぐることになる僕の旅は、始まった。